



連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り71

旅するベジタリアン

旅行作家

山口 由美

言葉ではなく

食事である

雨期に当たる六月のタイ、目立って多く見かけたのがインド人観光客だった。

中国のような一人っ子政策があるわけではなく、少子化問題も生じていない彼らの家族旅行はとかく大人数で、さらに兄弟・友人や仕事仲間の家族と連れだって旅する習慣があるらしく、団体旅行かと思紛うほどの大人数のグループが多い。昨今の経済成長は、彼らを明らかに海外へと押し出している。それは十年ほど前、中国人・韓国人観光客が増え始めた頃を彷彿させる勢いで、近年、世界各地で実感させられている。

バンコクからプーケットに向かう国内線では、そうしたインド人ファミリーのパワーに

圧倒された。離陸すると間もなく、フライトアテンダントが紙のボックスに入った機内食を配り始める。ベジタリアンなど特別食のミールは、一般の機内食がサーブされる前に一人分ずつ配られるのが普通だが、その日は、あまりにたくさんいたせいか、一般の機内食と一緒にベジサンドのボックスが積み上げられたカートがやってきた。

私の並びの席には子供ばかり四人が座っていたが、驚いたのは、就学前の、ほんの四五歳と思われる男の子が、真剣な表情で「これはベジですか？」と確認していたことだった。こんな小さな頃から、ベジタリアンであることを彼らは自覚しているのである。

教育さえ受けていれば英語を話す彼らは、経済力が伴えば、海外旅行には何の支障もない。だが、唯一、彼らを悩ませるのが食事

の問題らしい。宗教上の理由でさまざまな禁忌があるからだ。

カンボジア国境に近い島にあるソネバキリというリゾートでは、漁村と滝を巡る半日ツアーで、インド人家族の一行と一緒になった。ソネバキリは、タイでも指折りの高級リゾートである。そこに滞在しているということは、いつも手放さない携帯電話でひっきりなしに指示を出している彼のビジネスが、かなりの成功を収めている証しなのだろう。聞けば、休暇の旅行は、いつもビジネスパートナーの家族と一緒に、八人の大所帯で出かけているという。

日本人だと言うと、質問攻めにされた。「次の休暇には日本に行きたいと思っています。ほら、有名な花があったよね。あれを見るのは、いつがいいのかな」

「桜ですね。ならば四月です」

「桜は日本のどこに咲くんない」

「日本のどこでも咲きますよ」

「大阪とか？」

「大阪にも咲くし、京都もいいし。東京にも咲きますよ。でも花の咲く期間は短いから、それに合わせないと。時期が終わったら、北上すればいいんですけどね」



ソネバキリの朝食では、野菜や果物を好みに合わせて調理してくれる

彼らの夢が広がった瞬間だった。

私も誇らしい気持ちになって、桜の美しさを語った。でも、次の質問で、言葉に詰まってしまったのだった。

「私たちはベジタリアンなんだが、日本に私たちの食べるものはあるかな」

すると彼の奥さんも、急に真剣な表情になって振り向いた。

「私たちは卵も食べないのよ」

ベジタリアンにも違いがあつて、彼らは、乳製品は食べるが卵は食べないのだ。

「このリゾートでは、私たちも十分に食事が楽しめる。満足しているよ」

私は、日本のお粗末な状況を考えて、さらに言葉が返せなくなってしまった。

宗教上の理由だけでなく、健康上、もしくは主義・主張によるベジタリアンは、いま世界的に非常に増えている。欧米人では、知識層や富裕層ほどベジタリアンが多い。だから、昨今、世界のラグジュアリーリゾートでは、ゲストの食べられないものは予約の段階で必ずチェックするし、通常のメニューの中にもベジタリアン向けメニューが普通に何種類も用意してある。

だが、日本のホテルや旅館でこうした対応

が整っているところは極めて少ない。ベジタリアンのインド人を北陸の旅館巡りで泣かせたとか、とんでもない話ばかり聞く。

どうも日本人には、特定のものが何らかの理由で食べられない状況への想像力が欠けているように思う。最近、ようやく食物アレルギーなどへの対応は進んできたが、ベジタリアンや宗教的な禁忌については、理解も対応もまだまだである。

日本にも精進料理の文化がある。そうしたものを利用して、ベジタリアンにも安心して楽しんでもらえる日本料理や、ベジタリアンに気配りのある旅館やリゾートがあつたなら、と思う。そろそろ旅するベジタリアンのニーズを本気で考える時代なのではないか。

彼らの経済力と人口を考えると、中国、韓国、インド人観光客の波がやってくるに違いない。そのとき、鍵になるのは、言葉ではなく食事である。

それにしても、なぜタイにインド人が多かったのだろう。やけに手慣れていた国内線の対応を見ながら、日本の観光庁よりずっと目ざといタイの政府観光庁が国を牽げて仕掛けているのかもしれない、私は想像した。

(やまぐち ゆみ)